

舞鶴引揚館では全身DDTの防疫消毒、大浴場での入浴、尾頭付きの夕食、婦人会の方々の歓迎と湯茶の接待と、感謝感激の三日間でした。

復員手当も六百元也受領しました。渡満以来三年一カ月強の強制抑留の永い永い旅でした。昭和二十三年八月十五日舞鶴駅を出発、京都駅で父が出迎えに来てくれました。家では母弟妹が首を長くして待っていました。ささやかな帰国祝いのパーティーをしてくれました。三年間の辛苦生活のため栄養失調で、堅いものは受け付けませんでした。せつかくの村松の浜口さんのお誘いで釣り舟に乗せてもらったのはよかったです。途中で舟酔い症状を呈し失礼をいたしました。その後、エラブカ組の松岡敬三氏の御好意に甘え、昭和二十五年十二月から昭和五十年六月まで松岡氏の経営する遊技場、レストラン、キャバレー、料理旅館、ホテル等の支配人として勤務しました。途中、昭和三十四年頃から昭和四十二年まで真珠養殖（長崎県五島列島）の事業に没頭しました。真珠養殖不況のため加工販売に転進、真珠貴金属宝石の専門店として全

国有名百貨店等の取引を行い、奮闘いたしました。一応事業体系の整備完了のため退職し、昭和五十年八月頃より平成二（一九九〇）年六月まで（協）津市専門店会専務理事として十五年間勤務し無事定年退職し、晴耕雨読の悠々自適の生活を送っております。

## マルシャンスク抑留記

三重県 林 英夫

はじめに

財団法人全国強制抑留者協会の三重県支部が今春おくれげせながら設立された機会に、抑留中の記事投稿の依頼を受けました。マルシャンスク収容所については、タンポフ・ラーダとともに抑留関係者による慰霊遺骨収集記事を含む幾多の報告があります。以下の拙文は、帰国復員以来既に五十有余年、薄れた記憶を掘り起こしつつ記述したものであります。不備不足の点、悪しからずご了承ください。

## 出生から入隊

大正十五（一九二六）年二月四日、神奈川県横須賀市に生まれる。昭和十七（一九四二）年三月、神奈川県立横須賀中学校四年終了、四月陸軍予科士官学校入校（埼玉県朝霞）、昭和十八年十一月同校卒業、直ちに陸軍航空士官学校入校（埼玉県豊岡）、昭和二十年三月同校卒業。乙種学生として下志津陸軍飛行学校に入校したが（下志津教導飛行師団に改編されていた）すぐに渡満、黒龍江省ガモントンの第四二教育飛行隊において乙種操縦学生（司令部偵察機）の課程を履修することになった。北満は空襲警報もなく訓練に専念でき、九月には課程を終了し実戦部隊に配属される予定であった。灯火管制もゆるやかで、たまの休日にチチハルに外出すると食べ物豊富で内地に比べ誠に申し訳のないような日常であったが、ひたすら優れた技量を持つ操縦者になり、速やかに第一線部隊参加することのみを念願していた。七月一日少尉に任官したが、引き続きの営内居住、訓練飛行に明け暮れる毎日であった。

## ソ連軍侵攻時

二十年八月に入って、回し読みの新聞で広島に新型爆弾が投下されたことを、八日にはソ連が対日参戦し各方面から満州に侵攻中であることを知らされた。部隊の所在地は、チチハル近郊で、国境の満州里―ハイラル―興安嶺を越えれば一本道であった。われわれは操縦学生の身分で、原隊も部下もなく比較的気楽な立場ではあったが、青天の霹靂、思いもよらぬ背信行為に暗然たる心境であった。まもなく飛行場に数機の戦闘機が配備されたこと、当隊が興安嶺方面の偵察を行つたが状況不明であったこと、操縦学生（二十八人）が格納庫前に整列し、六人が指人されて特攻機受領のため出発したこと、近くの野戦貨物廠が燃え終日黒煙をふきあげていたこと、命令受領の部隊長に従つて私は新京（長春）へ往復したが、飛行場は南満へ下がる飛行機でござつたがえしていたこと等が今でも印象に残る。ソ連参戦の九日から終戦の十五日まで全くの匆忙の間で、今となつては日時等定かではないが、改まった命令指示を受けたことはほとんどなかった。

## 終戦

八月十五日正午、終戦の詔勅の玉音放送が行われている時は、双発練習機二機に分乗し数人の同期生とともに部隊の撤退先である拉林飛行場（ハルビン南方約五十キロ）に向けて飛行中であつた。午後、辺鄙な拉林飛行場に降りた。通常着陸すると地上誘導をしてくれるのであるが、この時は誰も彼もただぼうっと突っ立っているだけであつた。「戦争は終わった、どうも負けたらしい」と告げられた。北満の渺たる飛行場の一角にあつてただ呆然自失するのみであつた。その後、南満鳳凰城へ集結という指示（これも、いつ、どこで、誰から受けたか定かではない）で十九日午前、拉林を出発した。たまたま新京まで行きたいという参謀の方が同乗されていたので、とりあえず新京飛行場に着陸した。更に鳳凰城へ向けて出発準備中、突然飛来した戦闘機、輸送機のソ連軍機によって飛行場が占領された。輸送機から薄汚い軍装でぞろぞろ降りてきたソ連兵たちは、滑走路に向けて機関銃の銃列をし、一切の飛行を禁止した。私は、この瞬間はじめて

敗戦の現実を深刻に肌を受け止めた。私たち同期数人は本隊から離れこの地、新京で事実上の終戦を迎えたことになる。チチハルからハルビンへ、更に徒歩行軍で牡丹江へ向かった第四二教育飛行隊の悲惨な運命は知る由もなかった。

### 新京での滞留生活

新京飛行場には、飛行部隊の移動途中あるいは連絡業務等で本隊を離れた者（主として将校）が相当数居合わせた。それらはすべて、第二航空軍の指揮監督下にまとめられ、市内いくつかの施設（主として学校）に収容された。食事等いかにして準備支給されたか記憶がないが、さしてひどい思いをした覚えはない。本隊からはぐれたわれわれ乙種学生（重爆・戦闘・司偵）十数人は第二四教育飛行隊長柴田少佐の指揮を受けた。当初は監視もさして厳しくなく外出もしようと思えばできた。あるとき市中でソ連兵に出くわした。ロスケとはよくもつけたあだ人だなあと感心しているとききなり自動小銃（マンドリン）を突きつけて、時計をよこせという。やむを得ず渡したが、彼の腕には

既に二つの時計がまかれていた。追いはぎとはこのことか、ダワイの第一号であった。戦争が終わったのだから、皆いずれ遠からず帰還できるものと思込んでいた。

九月に入るとすぐ涼しくなったが、その頃から千人単位の將校・下士官を幹部とする作業大隊が編成されて次々と出発していった。貨物列車に乗っていったという。そのころ貨物列車にはレール、枕木、家畜（牛、羊）、大豆、コウリヤン等が満載されて北上する光景がしばしば見られた。

#### シベリア抑留地への旅

やがて將校大隊が編成された。私もその中に編入された。白い丈夫な布が渡された。背負い袋（リュックサック）を作れという。苦心してできるだけ大きなものを作った。結局三年後、舞鶴に上陸するまで、これに衣料その他身の回り品を入れて持ち歩いてお世話になったしろものであった。

十月下旬いよいよ移動ということで有蓋の貨物列車に積み込まれた。約千人、誰もが帰国列車と思ひ込んで

で疑わなかった。しかしながら列車はわれわれの期待に全くそむき、単調な振動音とともにのろのろと北進をはじめた。ハルビンから東南行すれば牡丹江を経てウラジオストックに向かう鉄道があるが、その夢はあつてなく破られ、ハルビンからは松花江ショウカコウの鉄橋を渡り北安を経て十一月中旬、黒龍江の河畔の黒河に到着した。新京を出発してからほぼ一カ月、列車の運行は誠に不規則で一カ所に何日か待機することもしばしばであった。その間、住民と物々交換で食料品を手に入れることもあった。この時期、黒河は既に結氷していた。対岸のブラゴベシチェンスクを望見し、まさに「国境の町」を実感した。水上夜間徒歩行軍で夜明けにブラゴエの駅に到着した。われわれ若年者はともかく、年配の方々にとっては誠に大変なことであった。われわれを搭載した貨物列車はここから更に北上してシベリア鉄道本線駅ベロゴルスクに入った。貨車は満鉄のものよりも一回り大きく、機関車などは近寄ってみると雲をつくように見えた。

われわれの期待もむなしく、列車は連日シベリア鉄

道を単調な軌道音とともに西行を続けた。外は見渡す限り雪原とタイガの山林、誠に心細い限りだが、われわれ一千人が一蓮托生の集団であることが唯一最大の救いであった。チタ、イルクーツク、ノボシビルスク、オムスク等を経てついにウラル山脈を越えた。シベリア鉄道は、特にわれわれを乗せた貨車列車などダイヤの枠外で、数時間の停車など朝食前で、とにかく大まかで大ざっぱなものであった。ニチエボー（なんでもない）という言葉の意味を体感した。列車はノボシビルスクでは数日間停車して、入浴―大きな蒸気入浴棟（サウナ）と衣服の消毒があったことをかすかに覚えていた。ウラル以西、いくつかの都市を経て、十二月下旬（日はさだかに覚えていない）高い教会の塔のある町で列車はとまった。マルシャンスク市という。下車の指示がでた。日本からどのくらい離れているのか全く分からぬところで三度冬を越すなどとも思い及ばぬことであった。収容所は町の郊外にあった。それまで携帯を認められていた軍刀はすべて没収され、十把一からげにしてトラックの荷台にほうりあ

げられた。なかには、さぞかしの名刀もあったことであろう。われわれはここで丸腰になった。

#### マルシャンスク収容所の生活

マルシャンスクは、タンポフ（タンポフ州の州都）北方約百キロ、モスクワ東南約四百キロ、当時人口数万の地方小都市と聞き及んだ。市中には高いロシア風の教会の塔があって、遠くからもよく見え夕日に映える姿はなほだ印象的であった。労役の往復この塔を見るたびに異郷に身を置く実感を味わった。塔は相当に傷んでいた。ただし現在は立派に修復されているという。市中をツナ川という川が北流し、鉄道、道路も発達し木材農産物の集散地で、直接独ソ戦の戦場にはなっていないかった。気温は真冬でも零下二〇度を下ることはあまりなかった。二〇度を下ると屋外労働は中止という定めと聞いたが、ロシア人は気温には全く関心を示さなかった。

収容所の規模は大きく、日本人（主として将校）約四千人のほか、ドイツ、ハンガリー、ルーマニア等の将兵が日本人よりはるかに多く収容されていた。彼ら

とは一応居住区が区切られていた。一棟約二百人収容の木造バラックが数十棟のほか、炊事場、蒸気浴場（サウナ）、消毒棟（ただしノミ、シラミ、南京虫は一向に絶えない）、医務室、各種倉庫、ソ連軍の施設等があつて、マルシャンスク周辺に点在する作業場の基地の役割を果たしていた。千島の択捉島で終戦を迎え、シベリアの収容所を転々としてわれわれよりずっと遅れてマルシャンスクに至った同期生は、シベリアに比べれば天国と地獄だともらした。先年遺骨収集団が同地を訪れたが、収容所の跡はなく墓地のみが残っていたということであつた。

シベリアに比べれば寒くないとはいへ、粗末なバラックに約二百人が二段の棚にめざしのように並んで就寝する。暖房施設として薪をたく粗雑なベチカ一つ、奥のほうまで暖気は届かない、夜中に用便にたつので入り口の近くは寒くてたまらん、夏は蚊とアブに悩まされた。ノミ、シラミは年間を通しての常連客。しかしこれらもニチェボー精神が身について次第に慣れた。数個の将校大隊は先任の戸田大佐のもとに連隊に

編成された。われわれは一つのまとまった部隊ではなかつたが、袖触れ合うも他生の縁ということですぐに親しくなつた。われわれ末端のものはいざ知らず、収容所当局との交渉の窓口となつた戸田大佐及びスタッフの苦勞と苦惱は大変なものであつた。

われわれの生活のなかでは、たくさんの悲哀と苦勞があつた。しかし楽しみもあつた。楽しみといつたら語弊があるかもしれない。しかし人は悲しみだけをかかえて生きるに耐えない。必ず楽しみを見つけ出し悲しみを中和する。これは人間の性（さが）というものはなからうか。一つのバラックの二百人が日常の生活単位である。日々の労働の区署も伝達され、楽な仕事で喜ぶもの、しんどい仕事で愚痴るもの、しかし一日の労働を終え帰つてくると、案外いい思いをしたもの、思惑はずれのもの、いろいろぶちまけて悲喜こもごもである。強制拘束されての集団生活では、食べることに、寝ることに、話すことが老若を問わず最大の安楽であることを知つた。給食はまったくお粗末で、栄養失調のため病死された方々も多数おられました。と

にもかくにも欠食ということはなかった。炊事場で働く日本人のなかには、器用な人もいて飯あげのとき味噌や豆腐をつくって人々を喜ばせた。黒パンのまじり、スープの薄さ、分配の難しさ等々については既に多くが語られているので省く。一同の中にはいろいろな芸達者がいた。浪花節、尺八、物まね、囲碁、将棋など夜は遅くまで人の輪ができた。小説本（五重塔、土）を持参した人がいて、またそれを上手に朗読をする人がいた。バラックの中央通路の心もとない灯火の下で静かに読み進むのに聞き入りながら次第に眠っていったものである。今でもその情景は脳裏に焼きついている。

二十二年、国際赤十字から国際郵便葉書が配給された。全員分はなく、まず家族もちの人に渡し、その後次第に各人に支給された。この葉書は相当期間を経てわが家にも配達され、戦後行方不明扱いとなっていた私が、とにかくソ連で生存していることを父母は初めて確認したという。

## 労役

苦しみの第一は強制労働であったことはいうまでもない。収容所のバラックに分散収容されて間もなく、右も左も分からぬうちに、身分階級に関係なく労働に駆り出された。サラトフーモスクワ間の天然ガス管理設工事の作業であった。酷寒の一月、固く結氷した地面を鉄棒で突いて砕く。水の粉がはね返ってくるだけで全く歯が立たない。ノルマの要求は激しく、突貫工事とかいって夜間照明をつけ作業させられた。寒さにも生活にも慣れず、さらには敗戦抑留という大ショックのさなか、抑留生活を通じ最大の苦役であった。この先どうなるのか全く暗然たる思いであった。

次いで、ピンスクという森林の村の作業場へ移された。徒歩行軍で半日以上、四百人ほどの集団であったろうか。行けども行けども尽きぬ林道、その中に点にする集落、ロシアの森の深さ、広さには驚いた。半地下式の細長い掘っ立て小屋、中央に狭い通路、両側に丸太を並べた棚、めざしのように並んで寝る。採光はほとんどなく極めて不衛生である。だいたい森林伐採

の作業小屋はこれが通常である。朝飯、点呼があつてから、昼食用の一かけらの黒パンを持って数キロ離れた奥地の伐採現場に向かう。ここには前の作業隊（ドイツ人と聞いた）が伐採した二メートルほどに切りそろえた雑木の丸太（主として燃料用）が集積されてあつた。これを各自担いで、足元の悪い細道を一列縦隊で、これまた数キロ離れた川岸まで運ぶ。二十歳そこそこのわれわれはともかく、年配の方々には大変な苦痛であつた。一同はゆっくりゆっくり歩く。現場監督はただひとり、いそげ、いそげとせきたてる。第三者が見たらさぞかしこっけいな光景であつたらう。一日二往復ぐらいいしたであらうか。

次いで、農場作業に駆り出された。これは雪が解けて水がひいてから秋口までの天幕生活で、広い平地の中、申し訳程度の囲いがあつた。作業は牛馬の飼料にする草刈りや、ジャガイモの栽培であつた。周囲一面の平地で山の姿がない。一面の平原で、製粉用の高い風車、大きな干草の山が散見された。牛馬の放牧もあり抑留生活としては比較的のんびりした時期であつ

た。農作業は大ざっぱであつた。種芋を満載した大きな箱車を馬に引かせ、底からぼろぼろ落しながら広い畑地を往復し、われわれがそのあと適当に棒で土をかぶせるというものであつた。収穫期になると、ここから各自しかるべき量を失敬して夕暮れ時炊飯し車座になつてたらふく食べた。各農家周辺のいわゆる自留地の作物はきわめて良く手入れされて大切に管理されていて、バザールに持ち込んで換金できる。公共農場のものについての関心は薄い。自留地のものには決して手を出さないということは鉄則であつた。草刈りは冬季の牛馬の飼料として重要な作業であつた。普通の手鎌をそのまま等身大にしたようなもので体全体で刈る。エンジン刈払機の先に長い刃がついているようなものだ。これにもノルマがあつたが、いいかげんなものであつた。夜半、露天で句会が催され、また雑談に花が咲いた。無聊をいやす歌会、句会は各地で行われていた。秋の訪れとともに、ここを引き払いマルシヤンスク収容所へ戻つた。

次いで、ビンスクよりやや近いこれまた森林の作業



現場（地名は覚えてない）に移された。針葉樹の大木の  
大森林地である。帝政ロシア時代を示す表示もあつた。  
ここには冬から夏近くまで過ごした。二百人ほどの集  
団であつたらうか。隊長は大串少佐という大変立派な  
方で、われわれは心から尊敬信頼した。

一抱えから二抱えもある喬木の根元で二人向き合つて  
座り、半月形をしたのこぎりを引いて切り倒す。高さは  
三〇メートルもあるので、その半径の範囲内は危険地帯  
である。倒れるときは大声を出して注意しあう。うなりを  
立てて倒れ雪煙をあげる光景は壮絶である。枝を打ち表  
皮をはぎ、さらに六メートルほどに切りそろえる。大勢  
で力をあわせ一本一本転がして林道に運び出す。雪道を  
ロープ（と言っても柳の表皮を編んで作った綱）で引  
いて川岸（川はマルジャンスタに流れている）まで運ぶ。  
川はもちろん結氷している。とにかく冬の間には大量  
の木材を川岸に集積する労働である。

四月に氷が解ける。ロシアの人々ははなはだ喜ぶ。  
労働の帰路、いきなり老婆から茶色に染めたゆで卵を

もらった。今日は復活祭だという。信仰のあついは  
洋の東西を問わないものだ。平地ははらんし、どこ  
が川筋が見分けがつかなくなる。二週間ほどで水が引  
くと二面に草が萌える。冬中に集積した大丸太を川に  
浮かべ、いかだに組む作業が始まる。ロープは柳の表  
皮で編んだ綱だ。ロシア人の仕事の見よう見まねでな  
んとかいかだが組めるようになった。数台のいかだを  
ロープでつなぎ、燃料用の木材を満載し、下流のマル  
ジャンスタまで数日かけて流して行くという。監督は  
顔なじみの背のやや曲がった老夫一人、腰に古ぼけた  
拳銃をお義理のようにぶら下げている。「ヤポンス  
キー ダワイ（日本人来い）」と言う。二十歳そこそ  
この者が興味半分で志願した。私もその一人であつた。  
いかだの一部にわらを積み込み、夜はそれにもぐりこ  
んでいかだを止めて寝る。なべ、飯盒等炊飯用具、日  
数分の黒パン、ジャガイモその他を持ち出発した。川は  
極端に曲流し流れは緩慢で、向かい風だと押し戻され  
る。そのときは、一人がロープを持って岸まで泳ぎ、  
樹木にくくりつけて逆流を防ぎ風待ちをす

る。なかに日の丸を隠し持った意気盛んなものがない。日中、棒の先に日の丸をつけていかだに立てた。

一同快哉を叫び大いにうっぶんを晴らした。監督は特にとがめだてはしなかった。彼の関心事は道中無事に大量の木材をマルシャンスクまで届けることにあった。川幅は数十メートル、広いところは百メートルをこえる。U字型の地溝を流れるので深い。放牧の牛の群れが泳ぎ渡る光景は壯観であった。ところどころに渡し場がある。夏季、川は便利で重要な交通路になる。マルシャンスクの埠頭で、計算の苦手な彼らによつていかなる受け渡しが行われたか全く存知しない。帰りは川沿いを徒歩一日で帰着したと記憶している。このようないかだ流しは数次にわたつて行われた。きつい労働であったが気晴らしができた。この地方は、五月から八月までが夏季で、人はもちろん天地万物が活気づく。三時過ぎには夜が白み、十時過ぎまで薄明るい。どこの村でも、どんな小さな集落でも、毎晩、老若男女が輪をつくり楽器（バラライカやアコーディオン）を鳴らし手拍子をとつて歌い踊り夜を

徹する。時にわれわれも呼ばれ時を忘れた。

抑留者の統制管理及び極限状態における意識

しかしながら、以上の記述とは関係なく故国へのさまざまな思いと焦燥感はず常時胸中を去来した。特に、相当期間の作業現場の労働を終えて、マルシャンスクに戻ったとき、『日本新聞（タブロイド版、ハバロフスクで発行という）』およびアクティブと称する者たちによる洗脳思想教育、アジ演説には、驚愕憤慨、こんな人物がどこにいたのか暗然たる思いに駆られた。これらの運動は、ソ連に対するおべっかに尽きる。権力者に阿諛迎合し、身の安全をはかる手合いはどこにでもいることを知った。強制労働よりマルシャンスクの思想的強制のほうがはるかに苦痛で不愉快であった（これらに関する詳細については、心から尊敬する先輩、第二航空軍教育動員参謀後藤清敏少佐の著書『シベリア幽囚記』（財）日本学協会発行に詳しい）。ドイツ軍将校たちの毅然たる態度は今でも私にとって生きた貴重な教訓である。

極限状態―生死の境をさまようという経験はなかつ

た。その理由の第一に、戦争は既に終結し、かつここは戦場ではなかったこと。第二に、ここはヨーロッパロシアの中央部であって、気候その他生活環境はさほど過酷ではなかったこと。第三には、作業現場で接するロシア人は、主として農民であったが、われわれに對して敵意を持っていなかったことがある。

#### ダモイ―帰国梯団

私はマルシャンスクの収容所における生活より各地作業所の生活のほうが長かった。昭和二十二年九月及び十月、二度にわたって帰国梯団が発出したという指しを伝え聞いた。

二度目のビンスタから戻ると、マルシャンスクは「ダモイ」のうわさで持ちきりであった。十一月初旬、ついに夢が現実となつて、みんな荷物を持って営門の前に整列せよという。姓人を呼ばれたものは外に出よ。呼ばれなかったものはバラックに戻れ、残余は港が凍るので来春だという。誠にすぎなく、つれない指示である。運命の分かれ目とはこのことか。私の人前と呼ばれなかった。第三次ダモイ梯団はあわただしく

出発した。今年のダモイはこれでおしまい、あとは来年の春とのこと、文字通り春を待つ生活に戻った。

厳冬の訪れる前に、小グループでまた現場作業に行くことになった。マルシャンスク収容所はどうもうるさくてたまらんといいことでこちらから申し出たかっこうである。ビンスクより更にずっと奥、大森林の中の半地下掘つ立て小屋であった。雪にうずもれて申し訳程度の農家が数軒あった。ここで最後の越冬をした。伐採作業はもちろんあったが、精神的自由を満喫した。住めば都という気分であった。雪解けを待つて再びマルシャンスクへ帰った。

#### 第四次ダモイ

二十三年五月、昨秋と同じように営門に並んだ。今度ほとんどどの者が呼ばれた。しかしなお少数の人々は姓名を呼ばれず居残りとなった。後藤少佐もその中の一人であった。

ナホトカまで約三週間、帰心矢のごとく沿線のこととはほとんど記憶にない。ただ、バイカル湖畔の壮大な風景だけは忘れられない。空、水、山々、自然がま

ぶしいほどに綺麗で、走行数時間一同われを忘れて見入った。

ナホトカの埠頭は帰還する兵士でごった返していた。ようやくここまで来たのだから事故や紛争を起さぬよう言動をつつしめという指示がどこからともなく伝わった。数日間、待機の後、岸壁に横づけされた戦標船「英彦丸」に乗船した。日の丸こそ掲げていなかったが（国連管理下の船舶を示す旗と称する旗を船尾に掲げていたが）、船長以下全員日本人、船も人もみんな日本のもの、これほどの安堵はなかった。

二日後、帰還船は山紫水明の港、舞鶴に静かに滑り込んだ。宿舎は兵営を改造したものとの記憶があるが収容所ではない。頭のとっぺんから足の先までDDTの防疫粉末消毒にどぎもを抜かれたが、三年ぶりの入浴、尾頭付きの夕食、婦人会の歓迎と心のこもった湯茶の接待は今でも忘れられない。渡満以来三年二月、昭和二十三年六月十四日復員手続き終了。復員手当六百円をもらった。固い椅子ではあったが客車を連ねた復員列車のいる舞鶴駅に、父と三重県の復員担当

職員が迎えに来てくれた。

#### 帰国後の生活

終戦以来行方不明の私の消息について、両親はソ連からの国際赤十字葉書が着くまでは非常な心配の毎日であったと思う。子や孫を持つ身となってその心労は痛いように分かる。その葉書も現在は行方不明である。戦後、わが家も御多分に漏れず食うや食わずの毎日であった。父は大学に行きたいという私の希望に対し反対はしなかったが、学資は送れないという。当然のことである。ソ連抑留生活に勇気を得て、向こう見ずに上京した。いろいろの人に助けられ、またご迷惑をかけながら二十八年三月、なんとか卒業し、三重県に戻り県立高校の教員となって第二の人生を歩むことになった。六十一年三月定年退職、その後私学に奉職し平成六（一九九四）年三月引退、今日に至っている。

現在は無職無為、若干地元の用役に服している。

（この小文を書くについては、「マルシャンズク会」代表世話人植田弘様より貴重な資料を頂戴いたしました

た)

【執筆者の紹介】

大正十五年二月四日 神奈川県横須賀市で出生

昭和十七年三月 神奈川県立横須賀中学校四年修了

四月 陸軍予科士官学校入校

昭和十八年十一月 陸軍予科士官学校卒業ただちに陸

軍航空士官学校入校

昭和二十年三月 陸軍航空士官学校卒業

四月 下志津陸軍飛行学校入校(乙種操縦

学生 司令部偵察機)

五月 満州国黒龍江省衙門屯第四二教育飛

行隊付 引き続き操縦学生の課程履

修

七月一日 陸軍少尉任官

八月十九日 新京飛行場において終戦

十月十三日 新京出発(将校大隊約千人)

十一月 黒河より黒龍江を渡りブラゴベン

チェンスクに至る

十二月二十二日 マルシャンスク到着

昭和二十三年五月十日 マルシャンスク出発(第四梯

団)

六月三日 ナホトカ到着

六月十一日 ナホトカ出発(英彦丸)

六月十四日 舞鶴到着

六月十七日 帰宅(三重県鈴鹿市)

昭和二十五年四月 中央大学経済学部(旧制)入学

昭和二十八年三月 同校卒業

四月一日 三重県立学校教員(桑名高等学

校、四日市北高等学校、桑名西高

等学校、四日市商業高等学校)

昭和六十一年三月三十一日 四日市商業高等学校定年

退職

四月一日 高田高等学校教員

昭和六十二年四月一日 鈴鹿短期大学教員

平成六年三月三十一日 同校退職

平成十一年五月 叙勲勲四等瑞宝章受章

現住所 鈴鹿市大池

(三重県 宇平 博)

## 抑留記

滋賀県 田中 秀雄

一、出生から入隊まで

長浜市三ツ矢元町現在地にて大正十三(一九二四)

年二月一日生まれる。昭和五(一九三〇)年四月一日長浜小学校に入学、昭和十一年三月二十五日同小学校卒業、家業の麩製造卸の合間を利用して十三年四月十日長浜青年学校(夜間)軍事教練、学科と計二時間通う。同青年学校を十六年十月十日中途退学、昭和十六年十月十二日大阪陸運造兵廠に徴用さる。

二、入隊から入ソ抑留生活について

昭和二十年一月二十日現役入隊のため徴用解除、二十年一月二十五日現役入隊、鉄道兵、中国東北部牡丹江鉄道第四連隊入隊、自動車兵教育を受く。同二十年五月三十日部隊出動のため特業教育中断。二十年六月

二日鉄道隊、南滿海城に出動、同二十年八月十四日停戦、同八月二十六日ソ軍による武装解除、八月二十七日ソ軍の管理下に入る。

東京ダモイとだまされ、上下二段の有蓋貨車に積み込まれ長途シベリアに送られた。十月九日入ソ編成海城出發、ハルビン新興保にて貨車乗り換え滿州里經由チタの近く(信号駅)で貨車を降りる。二〇キロ程へ行軍、到着。

十月二十九日頃より山林伐採、兵舎(収容所)建築、まき用材の伐採、用材搬出、トラックに積み込み等の作業に従事(約七ヵ月間)。昭和二十一年五月三十日、一三キロの作業地を下山、沿海州へ向け出發。六月十九日頃ソフガワニ到着、静養、九月中旬まで天幕兵舎、弱者として作業無し。

(注)ソ側軍医の診断による検査等級の事

十一月二十五日身体検査

第一級 重労働可能健康者

第二級 重労働可能健康者

第三級 軽労働可能健康者